救わないカナリアと泣き顔スワロー

月藤

窓の向こうの光の景色

どうして、ここから太陽が見えたんだろう。

どうして、ここに窓があったんだろう。

どうして、青空が見えたんだろう。

どうして、ーーーーー俺はここに閉じ込められているの？

ただの昔話だ。
とある村の森の奥深くに屋敷があって、そこには永遠を生きる怪物が棲んでいる、と。
確かめた者はいない。
なぜならその森は入った者を迷いに導き、ふと気がつくと同じところを歩くようになってしまっているからだ。その事実が噂に噂を呼び、小さな村では恐れられるような迷信となった。知らない村人はいない。昔話を知らない村人はいない。けれどその存在も誰にも知られていない。
村の老人が語り継ぐのは、その怪物の容姿と、強大な力のこと。
本当にいるかも知らない、とある怪物のこと。

怪物は、まるで血のような真紅の髪を持つ小さな少年だと。
彼は村でこう呼ばれた。

その赤の髪になぞらえて。
それはまるで神が怒った業火の炎であると。

暁のイラ、と。

これは、
屋敷に囚われた赤髪の少年と、"声"を聞いた天使の

彼らのための物語。

神の声が聴こえたら

「うるせぇ」

金糸を持つ青年がぼやいた。
白く細い指には煙草が挟まっていてその先は小さく火が灯っている。
苛立ちを誤魔化すように彼は煙草を地面に落として足で踏みつける。眉間には皺が寄っている。

"　　"

頭の中で声がするのだ。
いや、中というわけではない。
ただどこか遠いところで、"誰か"が何かを叫んでいる。
それが名前なのか、叫びなのか、慟哭なのか。
彼には判断はつかないが、煩いのだ。

「うるせえ」

聴こえる方に目をむける。
誰もいない。
近くにはいないことはわかっている。どこか遠いところで、"そいつ"は叫んでいる。

そういえば、と少しだけ思い出す。
"あの人"がいつか言っていたことだ。
彼自身捨て子であり、稚児のとき"あの人"が仕切っている教会に置き去りにされたのだ。
もちろんほっておいて見殺しにすることはできたし、他のところに預けることもできた。当時の教会は圧制で餓鬼ひとりを養う余裕があったわけがない。そう問うたことがある。
"神様がなぁ、お前を育てろって言ったのさ"
神を信じない"あの人"にしては珍しかった。

"お前にも神様ってインチキ野郎の声がきこえるかもな"

「うるせぇ」

そういう、ことなのだろうか。

"めちゃくちゃうるせぇんだよ、これが。お前だったらどうする？"

挑発するように笑う"あの人"の声を思い出す。
あの時、俺は、なんと答えただろうか。

"絶対に見つけて、黙らせます。力づくで"

"物騒な奴だな、って俺もか"

「うるせえ」

そう呟いて、彼はーーーーーカナリアは、笑った。